

現代日本語におけるナンチャッテの終助詞的用法 *Nanchatte* as Quasi-final Particle in Modern Japanese

ファルダ ズライダー
Farda Zuraidah

摘要

This paper observes the characteristic of *nanchatte* as a quasi-final particle in modern Japanese language. The author proceeds to reconsider *nanchatte*'s characteristic and function. The prior sentence to *nanchatte* has been described in the dictionary and in prior theories as an “exaggeration”, “overstatement”, “a lie”, and so on. The Function of *nanchatte* has been noted in the dictionary and prior theories as “reserves or make fun”, “embarrassment” and “joke”. However, after observing *nanchatte*'s examples, there were cases where what is quoted by *nanchatte* was shown as “a speaker's true feeling”. Such as, when someone says “*Suki desu...nanchatte! Hontou wa honki desu kedo ne* (I like you...*nanchatte!* Actually I'm serious)”. In this case, the speaker seems to quoting the prior sentence (*Suki desu* / I like you), than treat it as an exaggeration. By observing the characteristics of “*nanteicchatte*” and “*nanteitteshimatte*” and so on which is considered as the origin of *nanchatte*, the author found out that the following characteristics are common to both *nanchatte* and its origin. Furthermore, in this Paper the author argues that *nanchatte* as a quasi-final particle is derived from its origin which have the characteristics as follows: ❶ The speaker considers the prior sentence as “utterance to be quoted”. ❷ The speaker quoting the prior sentence, then treating it as an exaggeration (negligence remark). ❸ The quota belongs to the speaker himself. ❹ The prior sentence is an immediate utterance. ❺ Appears at the end of the sentence, and the sentence is concluded. In other words, the characteristics as mentioned above are claimed as an established condition of *nanchatte* as a quasi-final particle.

キーワード	なんちゃって	終助詞的用法	過言
	<i>Nanchatte</i>	<i>Quasi-final particle</i>	<i>Exaggeration</i>

1. はじめに

現代日本語の終助詞には「よ」「ね」をはじめ、「わ」「ぞ」「ぜ」「さ」などが存在する。これらの形式は、一般に、典型的な終助詞として知られている。しかし、近年研究対象として注目を浴びているのは、典型的な終助詞ではないものの、終助詞的な用法をもつ言語形式である。すなわち、並立助詞（「～とか。」「～やら。」等）や接続助詞（「～けど。」「～から。」「～し。」等）などのような派生的な形式である。これらの形式の中で、「～ってば。」も同様に終助詞的な用法を持つことが指摘されている。「～ってば。」は、引用形式に由来する終助詞相当の形式とされる（『現代日本語文法 4 モダリティ』2003 他）。

(1) 「ねえねえ、だれかがそこにいるってば。」

(『現代日本語文法 4 モダリティ』、2003 : 274)

「～ってば。」は「ト+言う+ば」と分析でき、引用マーカーである「ト」を含んでいる。この引用マーカーを含むという点では、「たら(ト言ったら)」、「という(ト言う)」、「なんて(などト)」や「なんちゃって(などト言ってしまっ)」のような言語形式も「～ってば。」と同様に引用表現から派生した終助詞と見なせる。

上記の終助詞的に働く引用形式の中でも、ナンチャッテは、「なんちゃっておじさん」という作り話をきっかけに流行した特異な出自を持つ言語形式である。ナンチャッテは流行、定着し、現在も使用されている¹。実際、現時点 2017 年でも、以下のような用例が確認できる。

- (2) 今月最後のみんなに会えるイベントなのでたくさんの人にお会いしたい 来月会えるまでさみしい時間が少し長いからちよっとでも佐藤の愛をもらいにきてほしい なんちゃって。ちよっと恥ずかしいこと言っちゃったな！笑笑 でもほんと！少しでもみんなに会えたら嬉しいな

(<http://ameblo.jp/fanta-star-yume/entry-12278255637.html> より 2017/5/26 投稿)

本稿では、上に挙げた派生的な終助詞の中でも、前述したような特異な出自を持つナンチャッテに着目する。先行研究では考察の視野に入れていない観点として、ナンチャッテの起源と考えられる「なんて言っちゃって」や「などと言ってしまっ」などの特徴を観察し、終助詞的な用法のナンチャッテが元来の用法から見てどのように位置づけられるのかを探る。まず、次節では、辞書や先行研究におけるナンチャッテの記述を確認し、具体的な課題を設定する。

2. 先行研究

2.1. 辞書におけるナンチャッテ

まず、ナンチャッテに関する詳細な記述の見られる辞書について参照する。

(3) 『日本国語大辞典 第二版』

- a. (副詞「なんて」に動詞「いう(言)」、連語「ちゃう」、助詞「て」の付いた「なんていっちゃって」の変化したもの) などと言ってしまっ。
- b. 俗に、何かを述べたあとに、それが誇張だったり言い過ぎだったりしたのを、留保あるいは茶化す意味合いで用いることが多い。

(4) 『日本俗語大辞典』

- a. 何かを言った後に誇張やうそであることを照れ隠しに言う最後に付け足すことば。
(中略)「このあいだのお礼が言いたかったんです、なんちゃってね」
- b. ブランド品に似せて作った贗物。また格好を真似た偽者。にせ。(中略)「なんちゃって～ にせものの。有名ブランドの名を後に着ける。『そのバック、なんちゃってシャネルじゃないの?』」

(5) 『三省堂国語辞典 第七版』

- a. なんちゃって [←なんて言っちゃって・などと言ってしまっ]
- b. [一] (連語)

発言のあとで、「今のは、うそ」「かっこつけすぎた」などにごまかすことば。
な（あ）んて。なあんちゃって。「もう遊ばない、—」

c. [二] (造語)

〔なんちゃって—〕 みせかけの。それらしい。

「—英語 [=英語らしく聞こえることば]・—制服 [=制服ふうの私服]」

以上の辞書では、ナンチャッテの起源 ((3)a 及び(5)a) や意味について記述が見られる。また、ナンチャッテには(4)a「このあいだのお礼が言いたかったんです、なんちゃってね」や(5)b「もう遊ばない、なんちゃって」のような文末に現れる終助詞的なものと、(4)b「そのバック、なんちゃってシャネルじゃないの？」や(5)c「なんちゃって制服」のような名詞を修飾する用法（名詞修飾用法）があることが分かる。本稿が扱うナンチャッテは前者の文末に現れるナンチャッテ（終助詞的用法）である²。（以下、名詞修飾用法と区別して呼ぶ場合ではない限り、終助詞的なナンチャッテを指して単にナンチャッテとする）

2. 2. 先行研究におけるナンチャッテ

ナンチャッテに関する研究としては、管見の限り、井上（1978）、メイナード（1997）、金城（2007）がある。但し、社会的な視点からナンチャッテを、当時の社会がどのように受け入れ、流行させたのか論じた井上(1978)は本稿が明らかにしたい終助詞的用法のナンチャッテの特質や機能とは係わりが薄いため、これ以上は触れない。終助詞的用法のナンチャッテについて重要な成果を上げたメイナード(1997)と金城(2007)を以下で紹介する。

2. 2. 1. メイナード(1997)

メイナード(1997)は、自己引用・想定引用という引用表現の機能に焦点を当てた論考である³。具体的には、新聞コラムに出てくるかぎ括弧でくくられた引用表現と、少女漫画に出てくる引用（主に「て」、「って」）表現を観察し、引用がどのような機能を果たすかを談話分析の視点から考察を行っている。その中で、ナンチャッテについて以下のように指摘する（用例番号は筆者による）。

少女マンガでは、微妙に揺れ動く若者の恋愛感情が描写されることが多い。そのようなコンテキストで発話行為を軽減する用法や、パロディ的な用法が見られる。

(6) ほしな：「けどおめエのめでわかる」

さり：カアア...

ほしな：「なーんちゃってな」

感じるぜ おまえの心 さっきからずっと.....

恋の告白らしき表現のあと、「なーんちゃってな」と引用表現を付け加えることによって自分の発話に距離を置き、恥ずかしさをまぎらわせているケースである。

（メイナード、1997：164）

上記引用のように、メイナード(1997)では、自己引用の一つとしてナンチャッテには、話し手自身が発話した内容を自ら引用することによって、自分自身の発話との距離を置いてその効果

を軽減するという「発話行為を軽減する用法」と、発話行為を演技するという「パロディー用法」があると述べる。ナンチャッテを引用、なかでも自己引用の一形式として扱っている点は首肯できる。しかし、メイナード(1997)はナンチャッテ文の実例について詳細な検討を行っていない。扱った用例は上の例(9)の1例のみであり、ナンチャッテのすべての特徴を見渡せるとは必ずしも言い切れず、さらに考察する余地がある。

2. 2. 2. 金城(2007)

金城(2007)は、本稿が扱う終助詞的用法ナンチャッテのほか特に名詞修飾(連体修飾)としてのナンチャッテについて焦点を当て、語用論的な観点から考察している。終助詞的用法ナンチャッテに関わって、以下のような指摘がある。

「なんちゃって」によって発言を撤回(留保)しようとする発話者は、自らが望んでいない発言をしてしまった、自らそう信じていないことを言ってしまったという点を認めるものであった。(中略)、それを修正する目的ですぐさま「なんちゃって」発言をしたのだ。
(金城、2007: 38)

また、ナンチャッテの使用場面とその理由について、以下のように述べている。

これは「なんちゃって」がインフォーマルな個人的やりとりの場でのみ用いられるという制限を持ち、さらに自らの発言(前言)が冗談であったということを指示するためである。(中略)。よって、発言内容は真剣に取られるべきものではない。(金城、2007: 43-44)

終助詞的用法のナンチャッテにおいて、「冗談」への修正という金城(2007)の考え方は、名詞修飾用法ナンチャッテの現象も説明できる点で一定の説得力がある。金城(2007)の扱ってきたナンチャッテは、「発話者は例えば冗談の通じないような相手に(たまたま)冗談のつもりで発言をし、相手が真剣にその内容を受け取ってしまわないように事後に解釈の基準を提示する」ということがある。(金城、2007: 45)」というケースにあたるものである。一方で、本稿の調査においては、前掲の例(2)のようにナンチャッテの前接文が「本心」として捉えうるケースもみられた(このことは後続文の「でもほんと!少しでもみんなに会えたら嬉しいな」からも示唆される)。ナンチャッテの前接文が話し手の本心と見られる(2)のような場合がどのように位置付けられるか、冗談という説明とどのように結び付けられるか、という点において課題が残る。

2. 4. 先行研究のまとめと問題設定

前項までの辞書記述および先行研究は以下のようにまとめられる。

- (a)ナンチャッテは「なんて言っちゃって」や「などと言っちゃって」(『日本国語大辞典 第二版』、『三省堂国語辞典 第七版』)の変化したものである。
- (b)ナンチャッテは以下の①～⑪の用法が示されている。これらの用法は大きく2種類に分けられる。すなわち、①～⑤はナンチャッテが前接部をどのように特徴付けているか、⑥～⑪はナンチャッテ自体が何を行っているかについての記述である。

- ①「誇張」(『日本国語大辞典 第二版』『日本俗語大辞典』)
- ②「かっこつけすぎ」(『三省堂国語辞典 第七版』)
- ③「言い過ぎ」(『日本国語大辞典 第二版』)
- ④「うそ」(『日本俗語大辞典』『三省堂国語辞典 第七版』)
- ⑤「冗談」(金城 2007)
- ⑥「留保」(『日本国語大辞典 第二版』)
- ⑦「撤回」(金城 2007)
- ⑧「茶化す」(『日本国語大辞典 第二版』)
- ⑨「ごまかす」(『三省堂国語辞典 第七版』)
- ⑩「照れ隠し」(『日本俗語大辞典』)
- ⑪「恥ずかしさをまぎらわせる」(メイナード 1997)

終助詞的用法のナンチャッテは、以上のように(a)起源や(b)用法が記述されてきたが、必ずしも十分であるとは言えない。とりわけ、ナンチャッテは「なんてこと言って」「なんて言っちゃって」「などと言ってしまって」など(以下、「ナンテ言ッチャッテ類」)から変化したとされているが、辞書や先行研究では、これらの元の形式と現代日本語における終助詞的用法のナンチャッテとがどのように類似・相違しているかについての観察・考察には及んでいない。しかし、ナンチャッテの特質を明らかにするためには、ナンテ言ッチャッテ類の一般的な特徴と対比することが必要である。ナンチャッテの起源(a)と考えられるナンテ言ッチャッテ類における終助詞的用法の成立条件と照らし合わせ、終助詞的用法のナンチャッテの成立条件を明らかにすること(課題一)で、多様な諸用法(b)に統一的な説明(課題二)を与えることができると考える。そこで本稿では、ナンテ言ッチャッテ類とナンチャッテの特徴や相互の関係の解明を目的として、各形式の観察・考察を行う。

3. ナンテ言ッチャッテ類の特徴

ナンチャッテがナンテ言ッチャッテ類の変化したものであるならば、ナンテ言ッチャッテ類と何かしらの共通点があるはずである。また、ナンテ言ッチャッテ類は「ナンテ+言ウ+テシマウ」から成立した連語であるという見方に立てば、ナンテ言ッチャッテ類にナンテと言ッテシマウの文法的・意味的機能が多分に引き継がれていると考えられる。

ナンテについては、(ッテ及び)ナンテの前節部の情報と話し手との心的距離を考察する Suzuki(1998)の分類がある。Suzuki(1998)では、ナンテには 1)「補文標識(*Complementizer*)」2)「話題マーカ―(*Topic Marker*)」3)「記述マーカ―(*Description Marker*)」4)「文末表現(*Sentence-final Expression*)」のほか、5)「引用マーカ―(*Quotation Marker*)」という用法を指摘する。一方で、シテシマウは、「基本的に、本来実現しにくいこと、実現してはならないことが実現するということを表す」とされている(『日本語文法 3 アスペクト・テンス・肯否』)。これを踏まえ、発話によるシテシマウ、すなわち「言ッテシマウ」の場合、「実現しにくい発話や実現してはならない発話の実現する」、要するに、「言いにくい発話や言ってはならない発話の実現する」ことを表すと予測できる。まずは、ナンテ言ッチャッテ類の構成要素である「ナンテ」と「言ッテシマウ」の用法を視野に入れつつ、ナンテ言ッチャッテ類の特徴を把握する。

『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』『名大会話コーパス』『日本語話し言葉コーパス』を観察したところ、ナンテ言ッチャッテ類は1例も観察されなかった。一方、『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』（以下、BCCWJ）からナンテ言ッチャッテ類の例を検索したところ、少ないながらも8例が確認できた⁴。また、ここで観察できたナンテ言ッチャッテ類の前接部に着目すると、すべてが引用部であり、ナンテ言ッチャッテ類は引用文をなすことが分かった。

この特徴を踏まえると、引用部がだれに帰属するか（誰の発話か）によって区別する必要があると考える。そこで、次節以降では引用文の元発話者を主な観点として観察を行う。なお、本稿における「引用部」はナンテ言ッチャッテ類（及びナンチャッテ）の前接部もしくは前接文を示す。引用文の「発話主体」については、「発話している文全体の主体」と「引用部を発言した（または発言するであろう、並びに、考えている、または考えているであろう）主体」、といった区別が設定できる。本稿では、前者を「話し手」、後者を「元発話者」と呼ぶ。また、引用部の元発話者は、一般に、第三者に限らず、聞き手や話し手自身の場合もある。そこで、本節では、引用部の元発話者を第三者・聞き手・話し手の三つに分けて、全8例におけるナンテ言ッチャッテ類の特徴を考察する（下線部はナンテ言ッチャッテ類、点線部は引用部を示す。）

3. 1. 元発話者が第三者の場合

まずは、引用部が第三者による発話である用例(7)(8)(9)から考察していく（全3例）。引用部には、(9)のような、過去に第三者によって実際に発話されたもののほか、(7)(8)のような、話し手が引用する前に実際に第三者が発話したかどうかは不明だが、世の中の誰かがどこかで発言した（実現済みとみなした）第三者によるものも見られるが、いずれも引用部が第三者に帰属した、ナンテ言ッチャッテ類文発話時以前の発話である。

- (7) 相手を大事に思っているからこそ、口から出てくるのは正直で誠実なホンネであるはずなのだ。それが、本当のことをいったら相手が傷ついちゃうのでは?! 優しくないとわれ、嫌われちゃうのでは?! とでも思っただことなのかしらん、ホントをいいがらない。明らかに似合っていないと思われる、例えばガールフレンドの髪型、服装等々に意見を求められても「うん、よく分かんないな。素敵なんじゃない?」なんていっちゃって丸く収めたりする。（BCCWJ:『あっこのおきらくジンセイ論』より）
- (8) 明らかに意見を異にしていると思われる、例えばボーイフレンドの見解に対して、反論を口にすることなく「うん、よく分かんない。人それぞれだから」なんていっちゃってお茶を濁したりする。こんな、ヒトを小馬鹿にした関係なぞ、どこ探したって他にはねーぞっ!! こんなの思いやりでもなんでもない、こんなの優しさでもなんでもない。（BCCWJ:『あっこのおきらくジンセイ論』より）
- (9) そうそう、うまい具合に三人とも同じクラスになれて、なんかものすごく兄ちゃんたちの息がかかってる気がするなーと思ってたら、やっぱりそうだったみたいなんだ。兄ちゃんの奴、やっぱ一度くらいは同じ教室で学んだか? なんて言っちゃってさ。それでも一緒のクラスになれたのは素直に嬉しくて、始業式のあった夜は兄ちゃんと七海ちゃんも一緒になって五人でドンチャン騒ぎしちゃったもん。あ、兄ちゃんっていうのは、オレの探偵修行の師匠。名前は水都真一朗っていうんだ。（BCCWJ:『好きなものは好きだからしょうがない!!』より）

(7)(8)は一続きの文章である。(7)(8)に後続する文「こんな、…(中略)こんなの優しさでもなんでもない。」から分かるように、丸く収めたりお茶を濁したりするつもりで発言されたであろう第三者の発話に対し、話し手は否定的な捉え方をしている。ナンテは5)「引用マーカ―」として話し手が情報から心理的に離れていることをマークするという Suzuki(1998: 457)の見方を踏まえれば、例(7)(8)の話し手は前接部をナンテで引用することによって第三者に帰属する引用部から一定の距離を置くことを示しているといえる。(7)(8)の話し手は引用部が発話されることに対して望ましくないと思えていることが一つの理由として考えられる。しかし、例(9)のような、引用部の内容(「同じ教室になりたがる?」という「兄ちゃん」の推測)が(ナンテ言ッチャッテ文の)話し手の思いに矛盾せず、望ましい内容の場合にも「なんて言っちゃって」が使われる。このことから、重要なのは話し手にとって引用部の内容が望ましいのか望ましくないのかではなく、引用部が「言いにくい発話や言ってはならない発話の実現」と捉えられていると考えられる。つまり、たとえ発話が望ましい内容であっても、発話されたことが望ましくないと捉えた場合、話し手が引用部に対して心的距離を取り、引用部の発話が「言いにくい・言ってはならないにも関わらず発話した」という過失の発言として示していると考えられる。本稿では、ナンテ言ッチャッテは、前接部が「過失の発言(いわゆる過言)」であることを示していると位置づける。

3. 2. 元発話者が聞き手の場合

次に、引用部の元発話者が聞き手である用例(10)を見てみよう(全1例)。(10)の引用部も(9)と同じく、元発話者が過去に発話済みのものである。「A:」「B:」は筆者による)

(10)A:「せっかくのお誘いですけど、もうそんな年じゃないのよ。このあいだは合コンやって、さんざんなめにあいました。もう若い人の真似しないで、年寄り同期で温泉へでも行くわ」

するとすぐにまたメールが来た。

B:「年寄りなんて言っちゃって。ごケンソン、ごケンソン。脂ののった女盛りじゃないですか。うちの課の女の子たちの間でも、奈央子先輩はとても人気あるんですよ。みんな奈央子さんのこと、どう呼んでいいのかわからないけど、お局っていうのとは違う。だからアネゴだなんて呼ぶんじゃないですか」

(BCCWJ:『D o m a n i』より)

後続文の「ごケンソン。ごケンソン」から判断できるように、年寄りを理由に誘いを断った(10)Aの発話を否定していることが捉えられる。(10)Bの話し手は「なんて言っちゃって」によって聞き手に帰属する「年寄り」という表現(発話)を、心的距離を取って引用し、言ってはならない発話の実現として捉えている。その結果、この場合も、聞き手に帰属する引用部が過失の発言(いわゆる過言)であることを示していると言える。

3. 3. 元発話者が話し手の場合

最後に引用部の元発話者が話し手の場合を観察する(全4例)。例(11)(12)(13)のようなナンテ言ッチャッテ類の前接部が「過去に実現済みの発話」のほか、(14)のような前接部が話し手自

身による「即時的な発話」である用例も見られる。「A:」「B:」は筆者による)

- (11) 井原スズ子の顔からは殺気が消えて、ほのかな色気さえ漂っている。 「ブス女なんて言ってしまうってすみません」 (BCCWJ:『変!』より)
- (12) 「私こそ物狂いなんて言ってしまうって」「あれはテストですので、気になさらないでね。四係は頭脳を使うんです」「いえいえ、ホホホホホ」 千恵はしなをつくって笑い、抹茶を飲みほした。 (BCCWJ:『変!』より)
- (13) 「先生、昨日はごめんなさい」 「えっ?」 「先生がいけない、なんて言ってしまうって。ぼく、取り乱していたんです。あやまりたくて電話しました」 取り乱す、などと大人びた言葉をよく知っていると思った。 (BCCWJ:『血を吸う夫』より)
- (14)A: おもしろい小説が書けそうな気がするし、小説が評判に評判をよんでテレビにもでられるかもしれない。 そしたら、あたしベンツが燃えた事件の現場を通りかかったんですよ、とさりげなく言おう。 いい小説書くために、あたしはいつも注意ぶかく現実を観察しているんです、なんて言っちゃって。 ふふふ。拾萬部突破も夢じゃなかったりして。まてよ。最近食べすぎで頬っぺたがぼっちゃりしてるから、すこしダイエットしたほうがいいな。 そのほうがテレビ映りがよくなって結婚の申し込みも…。
- B: 「純子! 純子」 戸口に立っていたサトが言った。 「自分の頬っぺたおさえてニヤニヤしてるなんて、気味が悪いねえ」 (BCCWJ:『死神村の三百歳探偵団』より)

例(11)(12)は連続した文章である。例(11)において、話し手は、「ブス女」という話し手の発話済みに対して、「すみません」という言葉で謝罪していることから、「なんて言ってしまうって」の前接部を自らの過言として捉えている。そして、謝った相手である(11)の話し手に対して、(12)の話し手は、(11)と同様、過去に相手のことを「物狂い」と言ったのは過言であると位置づけているといえる。後続文の「あれはテストですので、気になさらないでね。」という後続文からも明らかだろう。同じく、(13)においても、前文の「先生、昨日はごめんなさい」と後続文の「ぼく、取り乱していたんです。あやまりたくて電話しました」からも、過去に実現済みの「先生がいけない」を「なんて言ってしまうって」によって引用し、話し手自身は、過言と捉えているといえる。

従って、(11)~(13)においては、ナンテ言っちゃッテ類の前接部が言っはならないにも関わらず発話したという過失の発言であり、発話された過去の時点と引用部として発話された時点には一定の間隔があった。それに対して、最後の(14)では、前接部「いい小説書くために、あたしはいつも注意ぶかく現実を観察しているんです」と「なんて言っちゃって」が発話時を同じくする。テレビでインタビューを受ける場面を想像している(14)Bの話し手(純子)にとっては、望ましい内容であっても、現実の世界で発話するには「過言」と位置づけているように見える。つまり、話し手は言いにくい発話を実現したため、その発話と距離を置いて引用されるべき発話とみなし、即時に「なんて言っちゃって」を発話すると考えられる。従って、話し手に帰属した「過去に実現済みの発話」にのみならず、話し手に帰属する「即時的な発話」に対しても、話し手が心理的に離れていると位置づけた場合はその発話をナンテで引用として扱うことができるといえる。さらに引用部の発話の実現を言っちゃッテで「過失の発言(いわゆる過言)」として示しているといえる。

以上、ナンテ言っちゃッテ類においては、その起源となるナンテと言ッテシマウの様々の用

法のうち、ナンテの「引用マーカー」と言ッテシマウの「言いにくい発話や言ってはならない発話の実現する」用法に相当するといえる。また、前節部は第三者・聞き手・話し手に帰属している「過去に実現済み（とみなした）発話」のみならず、話し手自身による「即時的な発話」であっても、それが「心的距離を持って引用されるべき発話」と位置づけられた場合、話し手はその発話が誰に帰属するものであれ、ナンテで引用し、引用部を言いにくい発話や言ってはならない発話の実現、すなわち「過失の発言（いわゆる過言）」として示している。この機能がナンテ言ッチャッテ類の働きであろう。

なお、ナンテ言ッチャッテ類は接続助詞「テ形」で終わるため、後続節が存在することを表示する。従って、「文中」に位置している(7)(8)(11)の形式が本来の構造であると考えられる。しかし、文中に現れるほか、ナンテ言ッチャッテ類の直後に「。」が見られ、「文末」に現れるといえる(9)(10)(12)(13)(14)のような用例もある。これらの例では同じ文末に位置づけられるものであっても、内容的に文が終結している(9)(14)に対し、(10)(12)(13)は終結してはいえない。つまり、(10)(12)(13)では、ナンテ言ッチャッテ類で言い切っても、発言された内容は未終結である。すなわち、それぞれの後続文(10)「ごケンソン、ごケンソン。」(12)「あれはテストですので、気になさらないでね。」まで述べなければ、もしくは(13)「ごめんなさい」のように倒置するかたちで前文に発話されなければ、聞き手は後続文（係り先）を想定する。一方で、(9)(14)は後続すべき発話が文脈上に存在しておらず形態的にも内容的にも文が終結している。後続する要素が想定できず、ナンテ言ッチャッテが文末に独立して配置されるという点で、(9)(14)が終助詞的用法に最も近い用法であると言える。

以上の考察を踏まえると、ナンテ言ッチャッテ類は、**①②③④**の特徴を持ち、文末に表れる場合（例文(9)(10)(12)(13)(14)）、**⑤**のように係り先を持たず、文を終結する場合（例文(9)(14)）もあることがわかった。

- ① 話し手は前接部の発話に対して「心的距離」を持ち、前接部を「引用されるべき発話」とみなして引用する。
- ② 前接部を「言いにくい発話や言ってはならない発話の実現」という「過失の発言」（いわゆる過言）と位置づける。
- ③ 前接部の帰属先は第三者、聞き手、話し手のいずれもありうる。
- ④ 前接部が「過去に実現済み（とみなした）発話」「即時的な発話」のいずれもありうる。
- ⑤ 文末に表れ、（一部の例）後続すべき発話が文脈上に存在しておらず、文が終結している。

上の諸条件のうち、**⑤**を満たすナンテ言ッチャッテ類が終助詞的なナンチャッテの成立に大きく関わっていると考えられる。しかし一方で、文末に現れるナンテ言ッチャッテ類の実例の内、ナンチャッテに抵抗なく置き換えることができるのは例(14)のようなナンテ言ッチャッテ類のみである。これはなぜだろうか。この疑問を解決するためにも終助詞的なナンチャッテの特徴と対比し、照らし合わせて違いを考察する必要があると考える。

4. ナンチャッテの特徴

文末に現れ、終助詞的に機能するナンチャッテの用例を実際の話し言葉に近いテキストデータやコーパスを観察してみたところ、『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』『日本語話し言葉コーパス』においては1例も観察されなかったが、『名大会話コーパス』にて1例を確

認した。また、話し言葉コーパスではないが、『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』も観察してみたところ、話し言葉に近い文体である Yahoo!ブログ (23 例)をはじめ、書籍 (9 例)、雑誌 (2 例)、Yahoo!知恵袋 (1 例)に確認できた⁵。

先に、ナンテ言ッチャッテ類の前接部を中心に観察・考察し、ナンテ言ッチャッテ類の特徴として①~④を指摘するとともに、文末に立つ場合⑤があることを確認した。本節では、これらの観点を視野に入れつつ、終助詞的なナンチャッテの場合、どのような様相が観察できるのかを考察する。

終助詞的なナンチャッテ全 36 例を観察した結果、すべての用例において、ナンチャッテの前接部はナンチャッテ文の話し手自身に帰属する発話であることが確認できる。例えば、以下の(15)~(18)を見てみよう。(「A:」「B:」は筆者による)

(15)水が あばれて、キャッキヤと にげまわる あこちゃんたち。ごめん ごめんと、いそいで ぼくは、ホースを なみきのほうへ むけた。さあーさ、さ、さー。さ、さ、さ、さ、さー。やなぎの はが、うれしそうに音を たてる。もっと とおくへー。もっともっと たかくー。さ、さ、さ、さ、さー。ほーら、みてみて。にじが べたべた。左手も そえて 大きく ふると、にじも 大きくなる。上に むけると、わーい、あんなに たかいところ。 (にじが にあう みどりちゃんへ、ぼくから ごめんの プレゼント。なんちゃって。) じぶんで おもって、じぶんで てれちゃった。

(BCCWJ:『へんてこりんのかえりみち』より)

(16)A: 女性にお訊きします。年下の男の恋人は好きですか?からかいますか?好きでは無い振りをしますか?逃げてしまったらどのように思いますか?別の女性に行ったら寂しいですか?

B: 正直好きです。だって、可愛いもーん。年上の親爺の加齢臭とか体つきの不細工さを想像するだけでへどが出ます。そうですね、好きな振りと言うより可愛がるでしょうね。逃げてしまったら?また別の活きのいいのを探しまあす。なんちゃって。プライドに掛けて追いませんっ!!

(BCCWJ:『Yahoo!知恵袋』より)

(17)なんだかんだ言ってもなんにも変わらない自分にムカついたり。。。なにが、今年大人になる!っていきがってもなれるわけもなくてイライラしてばかりだったけどねwはあ~最後になりましたが、隣の席の人らうぜえ。(藁)なんちゃって。。本気だったりするけどw

(BCCWJ:『Yahoo!ブログ』より)

(18)「ほら、春菜さんは、いつか自分のお店を持つのが夢だっていたでしょう。資金のことなら、春樹さまに頼んであげてもいいのよ」「わ~オ、そんなことお願いしたら、あたしも愛人にされちゃうよ。絹香ちゃん第一愛人で、あたしが第二愛人 なんちゃって、フフ」酔いのせいで、春菜も口が軽くなった。(BCCWJ:『濡れる制服美女』より)

2 節でみた辞書の記述で示せば、(15)や(16)のナンチャッテの前接部は①「誇張」や②「かっこつけすぎ」、(17)と(18)は③「言い過ぎ」の発言に当てはまる。さらに、ナンチャッテでその発言を⑥「留保」して⑦「撤回」し、それが④「うそ」や金城(2007)の言う⑤「冗談」と位置付けられるという説明ができる。一方で、例(17)「本気だったりするけど」のような表現でナンチャッテ文の前接文が本心であることをわざわざ付け足す例も見られた。(「でも、白猫組入会のお褒めは本当ですよ」や「ホントはホンキですけどね。」などもある)。終助詞的なナンチャッ

テはどのような条件で何を示しているのだろうか。なぜこのように多様なニュアンスが意味用法として記述されるのだろうか。このことは、ナンテの「引用マーカ―」と言ッテシマウの「言いにくい発話や言ッてはならない発話の実現」と位置づけるという、ナンテ言ッチャッテ類の用法によって説明ができると考える。

つまり、ナンチャッテの前接部は、本来（照れくさかったりあからさまであったりして）発話しにくい本心（例(15)(16)）、本心であっても本来言ッてはならない発話（(17)(18)）にも関わらず話し手が実現させた（発話した）。そのため、その発話と距離を取るべき発話とみなし、即時的にナンチャッテ引用して、前接部の発話を過失の発言（いわゆる過言）と位置付けているのではないか。換言すれば、ナンチャッテでマークすることによって、話し手は言いにくい発話や言ッてはならない発話を自ら発話したことを明示的に位置づける。この見方に立てば、ナンチャッテの前接部について、一つ一つ「誇張」「かっこつけ」「冗談」などと考える必要はなくなる。さらに、単なる砕けた発話のように思える以下の(19)~(22)のような用例にも説明が与えられる。（「A:」「B:」は筆者による）

- (19)「うまくいったわ」「都合よくタクシーの先客が、おれたちに似た恰好だったからさ」
乗るとみせかけて、かくれたのだ。「忍法移し身!……なんちゃって」ご機嫌のふたりは、もうなんの警戒もせずにタクシーをつかまえたが…

（BCCWJ:『火の国死の国殺しを歌う』より）

- (20)「そうじゃないわ。知らなかったの。あのひと、結核にかかっているかもしれないのよ」京子は顔をあげ、ベッドにすわりなおした。「ろくに栄養とらないで、ずっと閉め切った家の中にいたんですもの。盗汗、微熱、食欲不振。具合が悪いっていうもんだから、わたし以前、あのひとを無理やりお医者のところへつれて行ったことがあるの。ツベルクリン反応もレントゲンも血沈の結果も思わしくなかったわ」「結核が流行してるからなあ」唯野はなんとなくテーバーがレトロ調二枚目の牧口に似合っているような気がしてあまり驚けなかった。「結核か結核でないか、それが問題だ、なんちゃって」「あのひとは確信してるみたい」京子の眼にまた涙がふくれあがる。

（BCCWJ:『文学部唯野教授』より）

- (21)倉本 なるほど。「もとから鬼」か。荒俣 だいたい国学って、この「もと鬼」をさがす学問だったんですよ。仏教の「あと鬼」への関心とはちがう。だから「もと鬼」こと妖怪の管轄が、やがて平田篤胤などの国学者に行くのは当然なんです。「もと鬼」宣長なんちゃってね（笑）。それと、男の鬼って、基本的に「もと鬼」じゃないかな。

（BCCWJ:『鬼の宇宙誌』より）

- (22)A: なんかよく昼、昼の時間2~3時間目ないとか、お昼からないとかだと、一緒に、
そう、極楽まで、ちょっと極楽まで。

B: うんうんうん#極楽まで#なんか、それがおかしいね。

A: ふーん A学院も極楽を通過していく。なんちゃって。

B: へえー、すごいじゃない。

A: うちから極楽まで10分だからね。簡単だわ。あっという間に。

B: そうね。

（『名大会話コーパス』）

(19)~(22)においても、先に見た(15)~(18)と同様に前接部は話し手自身による発話である。(19)「忍法移し身」は動物の皮の中に入り、動物になりすまして相手の目をくらます、忍者の体技・技術の一つであるが、似た恰好をしているタクシーの先客がおり、タクシーに乗るとみせかけることに成功した話し手は、あたかも自分のセリフのように発話している。つまり「忍法移し身！」と発話したのは話し手であり、第三者の忍者ではない⁶。また、(20)の前接部は、「生きるべきか死ぬべきかそれが問題だ」というシェイクスピアの有名なセリフを「結核か結核でないか、それが問題だ」と話し手がアレンジした発言である。同じく、(21)の「もと鬼宣長」は、話し手による有名な国学者「本居宣長」のダジャレであり、(22)は地名の「極楽」と死後に行く同音同字の「極楽」のダジャレである。これらの発話においても即時的にナンチャッテが使われる理由は、(15)~(18)と同様に「過言としての位置づけの明示」という見方で説明できる。

(19)の「忍法移し身」は、本来映画や時代劇ドラマの場面以外では言いにくい発話である。そして、(20)は結核にかかっていることを心配している聞き手の前で、結核をネタにするもので、発話してはならない理由が存する。(21)もざっくばらんな対話形式とは言え、話題は学術的であり歴史上の著名な学者の名前をもじって発話することは本来実現しがたいといえる。専門家ならではの実現である。また、(22)は日本語母語話者同士の雑談を文字化した『名大会話コーパス』から取り上げた例で、地名の「極楽」が本来簡単には行けない死後の「極楽」と同音同字であることから、「ちょっと極楽まで」や「A学院も極楽を通っていく」が文字通りの意味では実現しにくい条件を持ち、通常の場合では発話されにくい。(19)~(22)において、話し手は本来言いにくい・言ってはならない発話にも関わらず、おどけて発話したという点で、「過失の発言」という説明に矛盾しない。つまり、(19)~(22)Aの話し手は「面白くおどけた」発話をナンチャッテでマークし、言いにくい発話や言ってはならない発話を自ら発話したということを明示的に位置づけると考えられる。

以上、終助詞的なナンチャッテ全36例を観察した結果、ナンチャッテの前接部は、辞書記述を含む先行研究で①「誇張」②「かっこつけすぎ」③「言い過ぎ」とも捉えられてきたような発話のほか、(15)~(18)のような「話し手自身の本心」による発話や、(19)~(22)のような「面白くおどけた発話」なども観察でき、多様であることが確認できた。しかし、いずれも「言いにくい発話や言ってはならない発話」を「話し手自ら」「実現(発話)した」ことを、明示的に過失の発言と位置づけると考えることが出来た。この過言としてのマークが、それぞれの場面では、④「うそ」⑤「冗談」⑥「留保」⑦「撤回」といったニュアンスや、自ら⑧「茶化す」⑨「ごまかす」もしくは⑩「照れ隠し」や⑪「恥ずかしさをまぎらわせる」と記述されてきたような用法につながると考える。次に、本節で確認できた終助詞的なナンチャッテの特徴を、ナンテ言ッチャッテ類の特徴と照らし合わせ、関連性を考察する。

5. 終助詞的用法のナンチャッテとナンテ言ッチャッテ類との関連性

ナンテ言ッチャッテ類文とナンチャッテ文の特徴を観察した結果、3.3項で見たナンテ言ッチャッテ類の特徴①②は、終助詞的なナンチャッテにおいても共通している。しかし一方で、③前節部が「第三者・聞き手・話し手」に帰属しており、④「過去に実現済み(とみなした)発話」からも「即時的な発話」からも引用可能な終助詞的なナンテ言ッチャッテ類の前接部に対し、終助詞的なナンチャッテの場合には、前接部が常に「話し手に帰属し、後続のナンチャッテの発話とは(ほとんど)間がない「即時的な発話」であるという特徴もみられた。また、

文末に表れる終助詞的なナンテ言ッチャッテ類のうち、係り先を持たず、文を終結するという条件⑤を満たしている例文が一部のみ（例文(9)(14)）見られたのに対して、終助詞的なナンチャッテにおいては全36例がこの条件を満たしていた。

以上の考察を踏まえると、ナンテ言ッチャッテ類の特徴①を前提とし、②を共通の条件として、以下の①~⑤が終助詞的なナンチャッテの成立にとって必要な条件と考えられる。

- ① 話し手は前接部の発話に対して「心的距離」を持ち、前接部を「引用されるべき発話」とみなす。
- ② 前接部を「言いにくい発話や言ってはならない発話の実現」すなわち「過失の発言（いわゆる過言）」と位置づける。
- ③ 前接部の帰属先は「話し手」（前節部が話し手自身の発話）に限る。
- ④ 前接部は「即時的な発話」である。
- ⑤ 文末に表れ、（常に）後続すべき発話が文脈上に存在しておらず、文が終結している。

ナンテ言ッチャッテ類の(14)が、最も終助詞的なナンチャッテと類似し、ナンチャッテに抵抗なく置き換えられるのは、条件①②のみならず、終助詞的なナンチャッテの③④⑤にも矛盾しないためであろう。

一方で、(14)と同様の条件①②⑤を満たしている例(9)は、前接部が（話し手ではなく）「第三者」に帰属しており、「過去に実現済みの発話」からの引用という特徴を持ち、③④の条件を満たしていない。ゆえにナンチャッテに置き換え不可能となると考えられる。このことから、①~⑤のすべての条件が満たされなければ、終助詞的なナンチャッテは成立しないと言えよう。

ナンテ言ッチャッテ類のバリエーションと終助詞的用法ナンチャッテの関連性を以下の概念図にまとめた。終助詞的用法ナンチャッテと最も近いナンテイッチャッテ類のバリエーションを太い矢印（→）で表した。

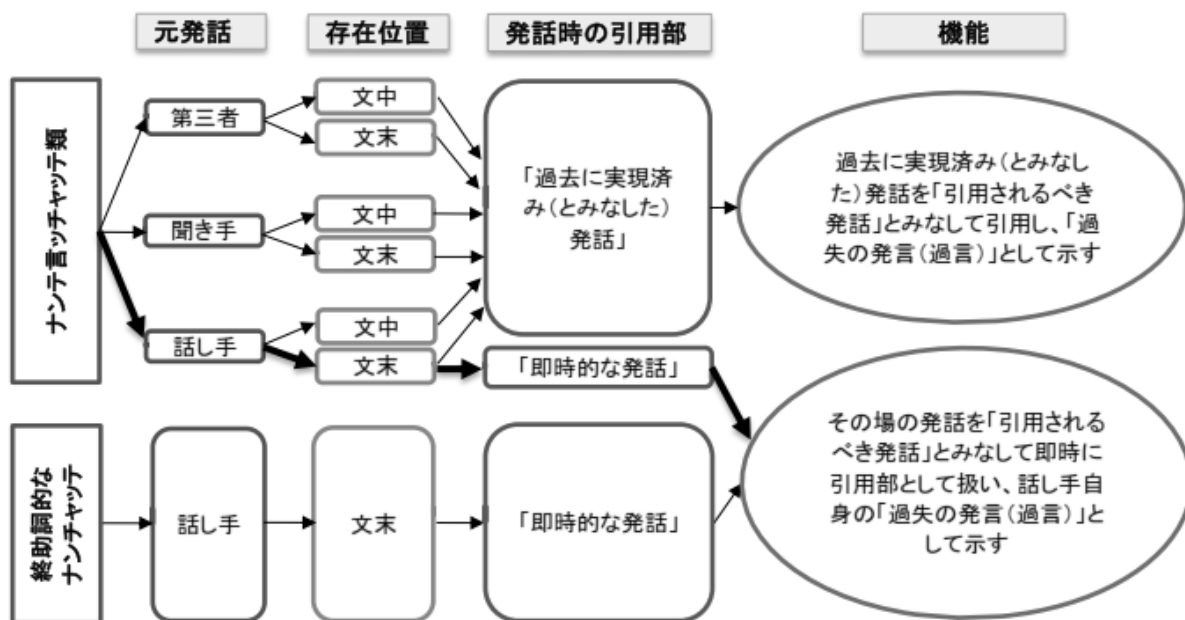


図 終助詞的用法のナンチャッテとナンテイッチャッテ類の関連性

6. おわりに

本稿は、文末に位置して終助詞として機能するナンチャッテについて、元の句的表現ナンテ

言ッチャッテ類の特徴に注目して合理的な説明を試みた。先行研究には見られないこの観点から、「文末に位置するナンテ言ッチャッテ類の成立条件と照らし合わせ、課題一「終助詞的なナンチャッテの成立条件はどのように位置付けられるか」、課題二「終助詞的なナンチャッテの用法に統一的な説明を与えることはできないか」に対し、以下のように述べた。

一 ナンテ言ッチャッテ類は、元の構成要素、すなわち「引用マーカ―」のナンテと「言いにくい発話や言ってはならない発話が実現する」ことを表す言ッテシマウにより、①「前節部の発話を引用と位置づける（心理的距離の表示）」②「言いにくい発話や言ってはならない発話の実現として、前接部を過言（過失の発言）と位置づける」といった特徴を持ち、この点で終助詞的なナンチャッテと共通する。一方、終助詞的なナンチャッテは③「前接部の帰属先が話し手自身」④「前接部が即時的な発話」⑤「文末に位置して係り先（後続節）を持たない」という特徴を持つ点で、これらの特徴に矛盾しない場合、ナンテ言ッチャッテ類はナンチャッテと言い換え可能となる（例えば例文(14)）。換言すると、①~⑤は終助詞用法ナンチャッテの成立条件として位置付けられる。

二 終助詞的用法ナンチャッテについては、談話の上で、①「誇張」②「かっこつけすぎ」③「言い過ぎ」や「面白くおどけた発言」のほか、「本心」を含む多様な性質をもつ前接部と共起している。ナンチャッテはその前接部がどのようなものであれ、「自らの発話を即時的に引用句として扱い、自ら「過言」と位置づけ」ており、ゆえに、場面に応じて、④「うそ」⑤「冗談」⑥「留保」⑦「撤回」⑧「茶化す」⑨「ごまかす」⑩「照れ隠し」や⑪「恥ずかしさをまぎらわせる」といった観察がなされると考える。つまり、話し手は自分の発話に対して心的距離を取るために、その発話を「引用されるべき発話」とみなし、即時的にナンチャッテで引用して引用部の発話を自ら「過失の発言（いわゆる過言）」とする位置づけを終助詞として明示する。このように、終助詞的なナンチャッテについて、話し手自身の過失の発言（いわゆる過言）としての引用標示とする本稿の見方は、①~⑪の一見多様な諸用法に統一的な説明を与える。

本稿の結論は、ナンチャッテについて「自己引用」としたメイナード(1997)の見方に一部重なり、その検証という意味合いもあるが、それに留まらない。つまり、本稿の観察・考察から、終助詞的用法ナンチャッテは、前接部の内容そのものではなく、前接部の発話を「過失の発言（いわゆる過言）」と位置づけることが重要であることが確認できた。従って、前接部の性質に関わらず、①~⑤の成立条件が整えば、ナンチャッテは使用可能と考えられる。本稿の見方の検証の上でも、運用上の多様性は、データを広げ追究していくことが必要であるが、本稿の見方は一定の説明力を持つと考える。

注

- 1 井上(1978)、米川(2002)、金城(2007)等。
- 2 筆者の調査では、『現代日本語書き言葉均衡コーパスBCCWJ』において、この2用法の他に、「安いブランドはみななんちゃってですから気をつけてね。」(『現代日本語書き言葉均衡コーパス：Yahoo!知恵袋』)のような名詞句代替用法も6例確認できる。これを含め、ナンチャッテの用法の派生、分化については別稿で詳述する。
- 3 メイナード(1997)の定義では、自己引用は、自分が言う(言いたい)ことや考えること、すなわち自分の言動や思考を引用節として発言するもの(メイナード、1997: 151-152)。

想定引用は「話の相手が言う（または考えている）であろう内容をあたかも言ったように先取りして引用すること（メイナード、2005：62）」であり、「明らかに発言していないコンテキストで、誰かが発言したかのようにその人に代わって引用表現で言語化する時の引用」である（メイナード、1997：157）。

- 4 「なんていっちゃって」2例、「なんて言っちゃって」3例が確認できた。また、「ちゃって」が元の形である「てしまって」となった「なんて言っちゃって」の検索も行ったところ、3例が確認できた。なお、「なんちゃって」という言葉は、どんな言葉が変化したものですか？という質問とその回答「などと言っちゃって＞なんて言っちゃって＞なんちゃって」の1例が見られたが、ここではカウントしない。
- 5 「なんちゃって」というキーワードで検索し、カタカナで書く「ナンチャッテ」と音引きを使った「なんちゃってー」を一括して数えたところ89例が確認できた。ナンチャッテという表現そのものに関する問答例（「なんちゃって」って今でも使う言葉でしょうか、および注4の該当例計3件）は除いた。結果、計86例を収集し、そのうち本稿の研究対象となる終助詞的用法のナンチャッテが35例見られた。（名詞修飾用法48例、名詞句代替用法6例）一方、同じ検索方法で『名大会話コーパス』に観察される3例の内、終助詞的用法のナンチャッテは1例であった。
- 6 一方、(7)(8)ナンテ言ッチャッテ類の元発話者は「うん、よく分かんないな。素敵なんじゃない？」「うん、よく分かんない。人それぞれだから」と言った人（第三者）であり、ナンテ言ッチャッテ類文の話し手ではない。

引用文献

- 井上ひさし「ある流行語論・ナンチャッテ」『月刊ことば』第4号、二～六頁、英湖社、1978年
Suzuki, Satoko. Tte and nante: Marker of psychological distance in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 29. pp.429 - 462 Amsterdam. 1998.
- 金城克哉「「なんちゃって」の用法の分析試論」『言語文化研究紀要 SCRIPSIMUS』第16号、三十三～五十二頁、2007年
- 見坊豪紀・市川 孝・飛田良文・山崎 誠・飯間浩明・塩田雄大 編『三省堂国語辞典 第七版』、株式会社三省堂、2014年
- 小学館大辞泉編集部編『大辞泉』第2版、小学館、2012年
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』第10巻、小学館、2001年
- 日本語記述文法研究会『現代日本語文法 3 アスペクト・テンス・肯否』、くろしお出版、四十五～四十六頁、2007年
- 日本語記述文法研究会『現代日本語文法 4 モダリティ』、くろしお出版、二百七十四頁、2003年
- メイナード・K・泉子『談話分析の可能性』、くろしお出版、1997年
- 「会話導入文—話す声が聞こえる類似引用の表現性—」『シリーズ言語学と言語教育』第4巻、六十一～七十六頁、ひつじ書房、2005年
- 米川明彦編『日本俗語大辞典』東京堂、2003年、2004年再版発行

例文出典

- 『アメーバブログ』(<http://ameblo.jp>)
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパスBCCWJ』(<http://chunagon.ninjal.ac.jp/>)
- 『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』付属CD-ROM
- 『日本語話し言葉コーパス』(<http://chunagon.ninjal.ac.jp/>)
- 『名大会話コーパス』(<http://chunagon.ninjal.ac.jp/>)

